

九州大学 エクゼン・サイエンス育成プロジェクト・  
第三回公開講演会

2009年12月19日(土)  
九州大学(箱崎キャンパス)  
理学部物理学科第二講義室

# 生きたまま体の中を 観察できる 探索分子の作り方と活用



RIKEN CMIS



(独)理化学生命科学研究所  
分子イメージング科学研究センター  
副センター長 鈴木正昭  
岐阜大学名誉教授・岐阜大学大学院  
連合創薬医療情報研究科客員教授  
浜松医科大学客員教授

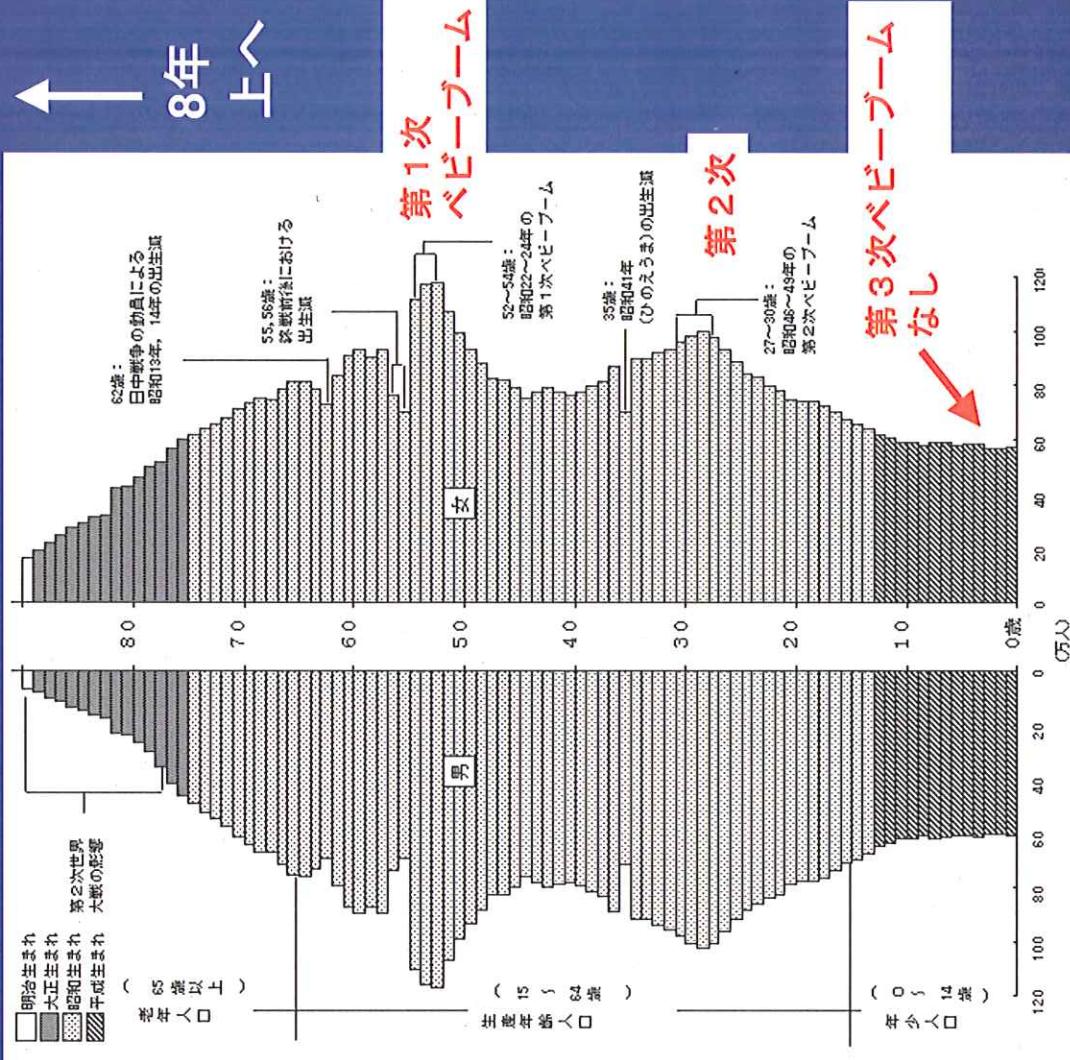
理研 分子イメージング科学研究センター

# 研究の動機

(平成13年10月1日現在・総務庁統計局)

# 日本の人口構成

20～30年後は  
超高齢化社会になる



## 問題点

戦後のベビーブーム  
将来の人材、夢と希望

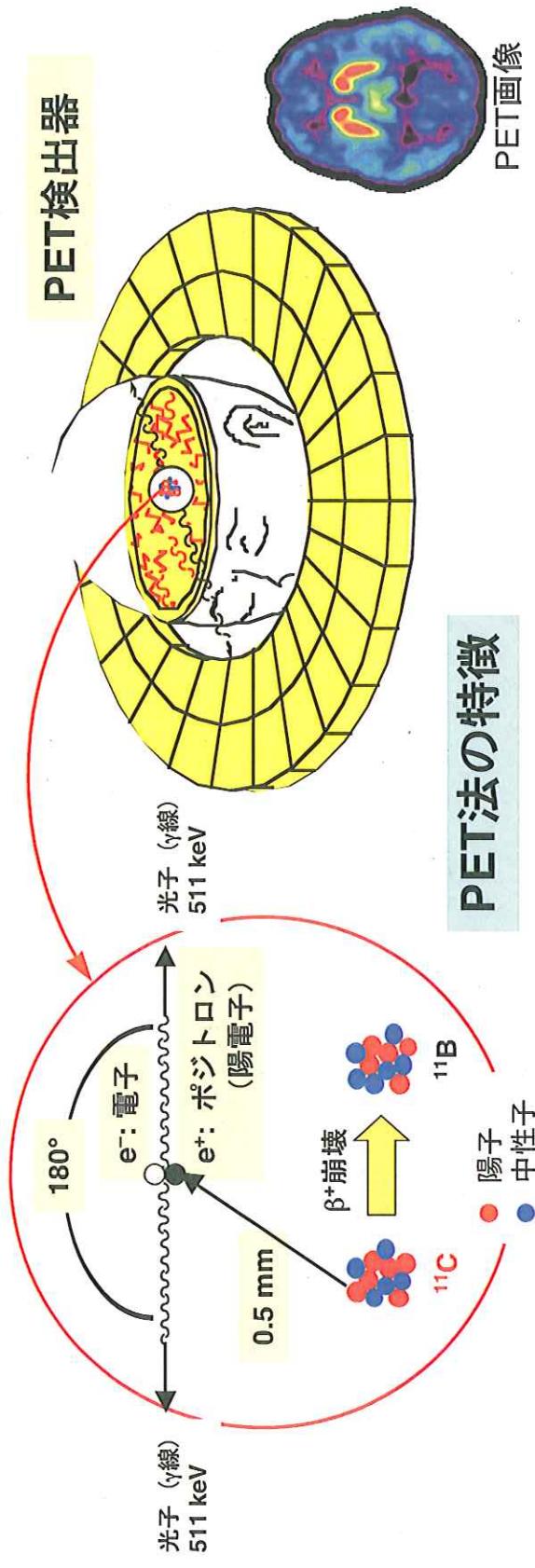


高齢化社会  
粗大ゴミ？  
国的一大事

「再生医療」と  
「創集」が鍵となる

# ヒト脳内の分子画像解析

## ■ PET（陽電子放射断層撮影法）の原理



- 適用濃度：最小  $10^{-18}$  M (atto mol)  
まで検出可能 → 超高感度、  
高空間分解能 (約 1.2 mm)、  
標的分子の多様性、  
高い定量性
- 非侵襲的分子画像化技術

適用放射核種	半減期
$^{11}\text{C}$	20.4分
$^{15}\text{O}$	2.07分
$^{13}\text{N}$	9.96分
$^{18}\text{F}$	109.7分

生体構成元素が対象

“Working against time”; 合成は時間との戦い

J. S. Fowler & A. P. Wolf, Acc. Chem. Res., 30, 181 (1997).

# なぜ今PETか？—創薬プロセスの大革新へ

化学とライフサイエンスとPET分子イメージング技術がマッチングした合理的創薬研究によりより優れた臨床適用創薬品質が可能

開発の早期にそれぞれの  
薬物動態が比較できる

動物

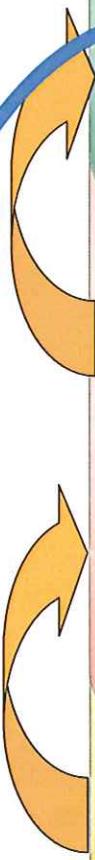
効果：臨床試験での歩留まりを上げる  
microdose(極微量の投与量)

毒性試験を簡略化

生きたまま丸ごとで何度でも

研究領域

加速



406753 235 (147) (83) 36 (1995~1999年)

Drug Discovery → Drug Development →  
Genomics and Proteomics → Metabolomics → 85% が脱落  
95% (2007年) 死の谷！

開発コストが  
1千億円！  
以上に高騰

**microdose:** 薬理学量の百分の一もしくは100 µg以下の投与量

ヒトの中の分子を見るためには  
安全かつ安定な分子プローブ  
を創る必要がある

分子プローブ = 探索するための機能を付加した分子

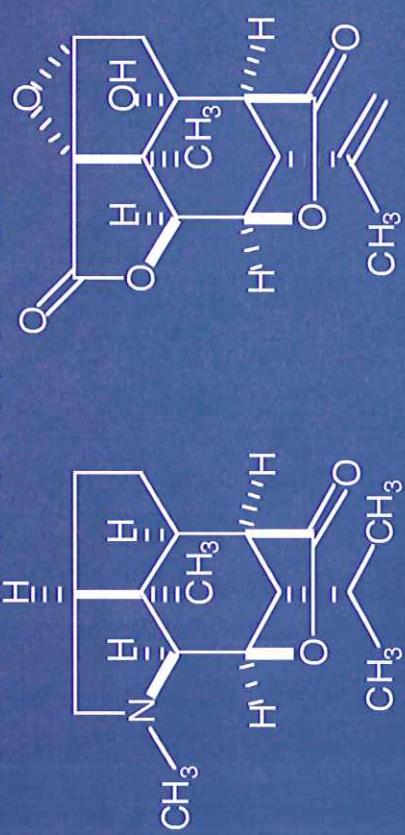
化学・生物学・工学・薬学・医学の融合により  
「ヒト生体内の分子科学」を推進する

→ 創薬・疾患診断法の革新へ

“Seeing is believing” = Evidence based medicine

# Neurotoxins in Plants

(植物神経毒)



## Dendrobine

ラン科植物  
(*Dendrobium Nobile L.*)

から単離

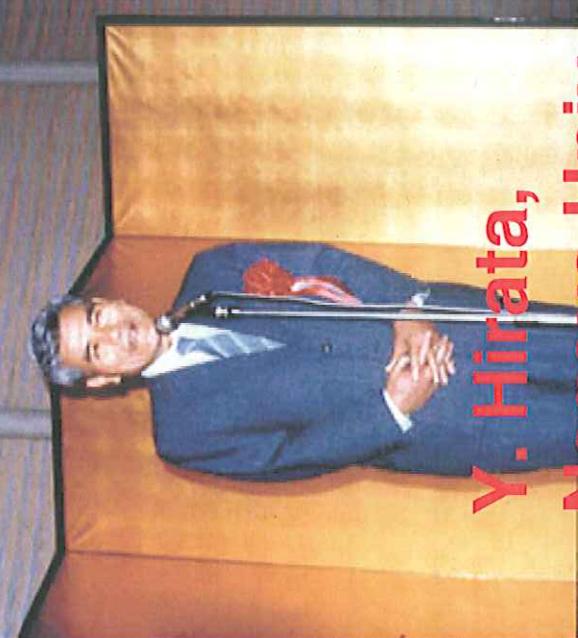
世界最初の全合成  
*J. Am. Chem. Soc.*,  
94, 8278 (1972).

**First Total Synthesis**



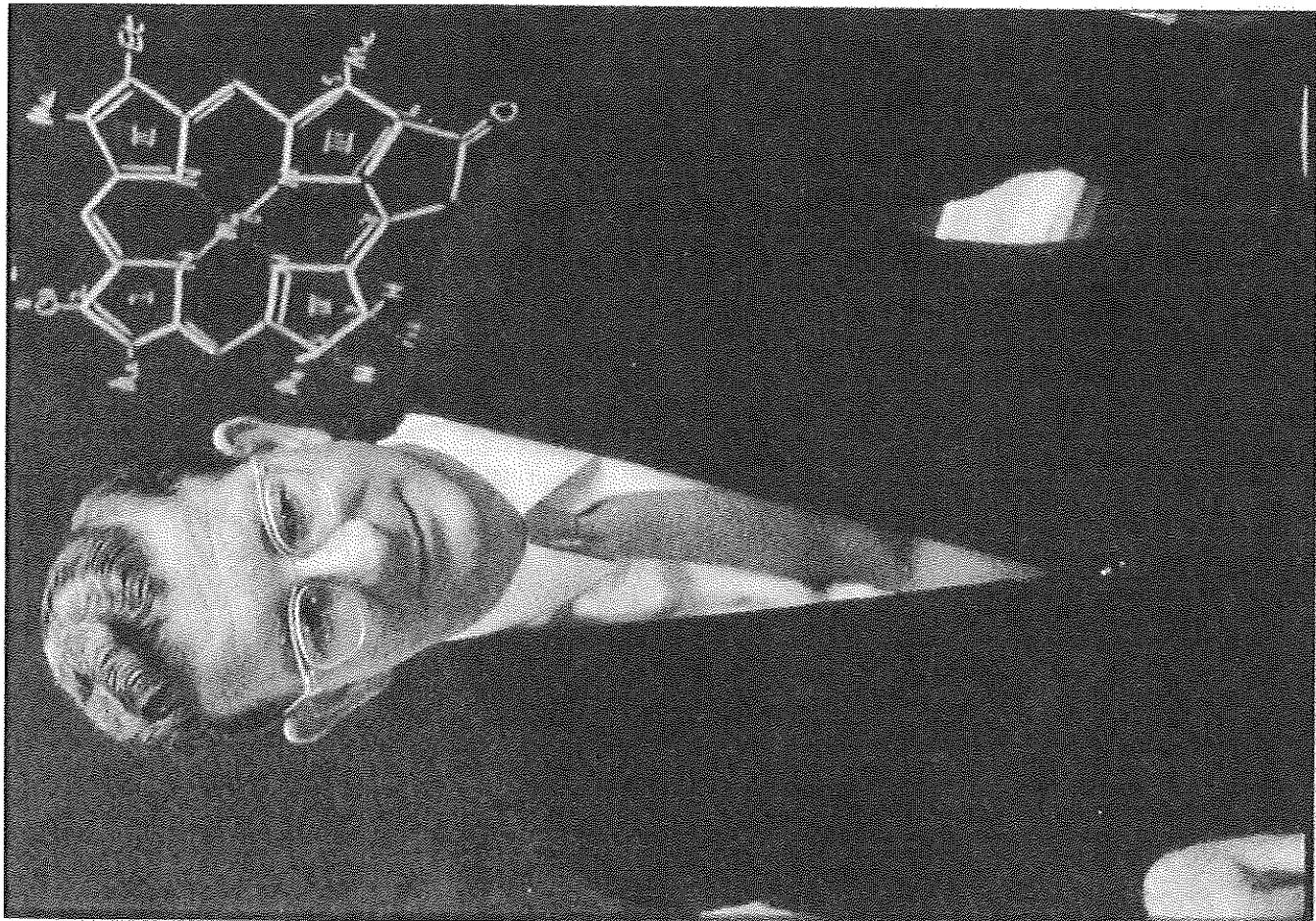
## Orchid (蘭)

平田義正先生(文化功労者)



Y. Hirata,  
Nagoya Univ.

名古屋大学理学部化学科・平田研究室  
での学生時代(1969-1975)



# 米国留学

(1976~1977)

Professor

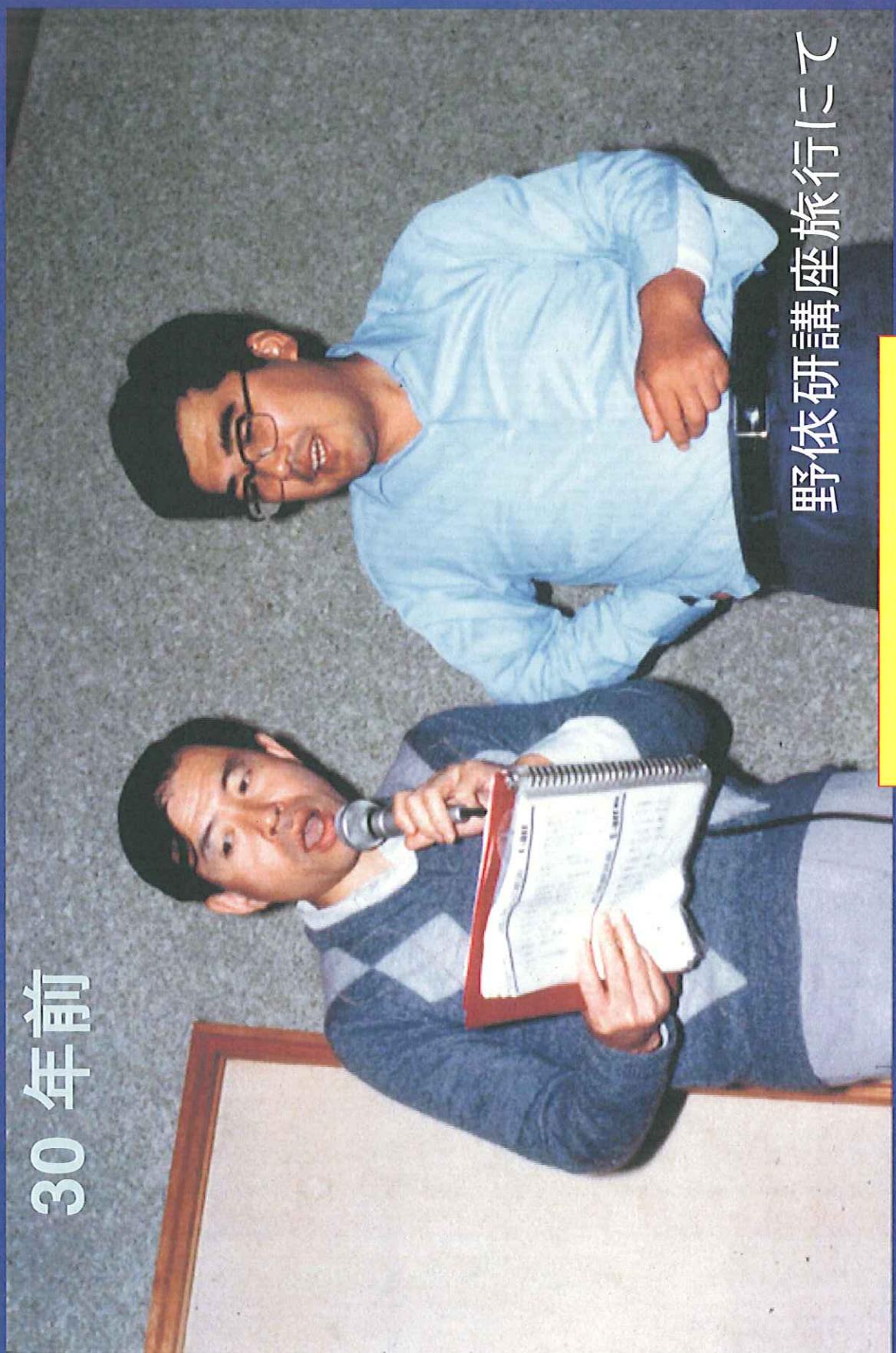
R. B. Woodward

Harvard University,  
Department of Chemistry  
(ハーバード大学化学科)

1970年頃の写真

1965年度の  
ノーベル化学賞受賞者

30年前

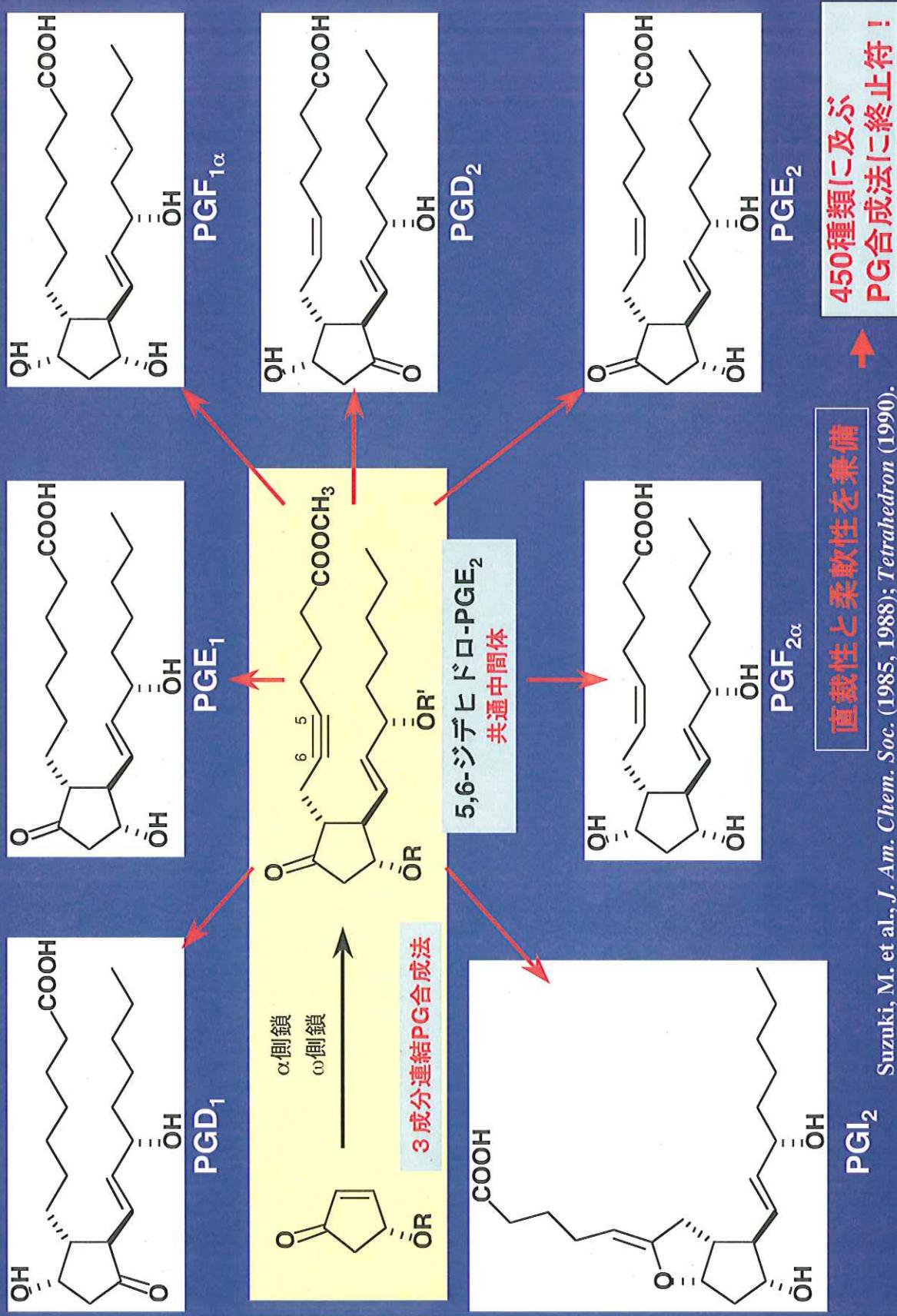


野依研講座旅行にて

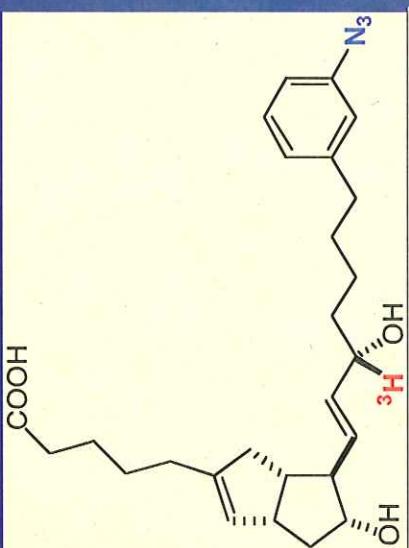
そして神戸♪



## 3成分連結法によるPG類の一般的合成法



# [<sup>3</sup>H]APNICを用いた光親和性標識実験による PGI<sub>2</sub>受容体(IP)の捕獲・同定



## ■ PGI<sub>2</sub>受容体への結合特異性

単一結合点  
解離定数 ( $K_d$ ) = 4.7 nM  
最大結合量 ( $B_{max}$ )  
= 0.58 pmol/mgタンパク質

## ■ PGI<sub>2</sub>受容体 (糖タンパク質)

分子量	細胞、組織
52,000	ヒト血小板
45,000	ブタ血小板
43,000	がん化肥満細胞 (mastocytoma P-815)

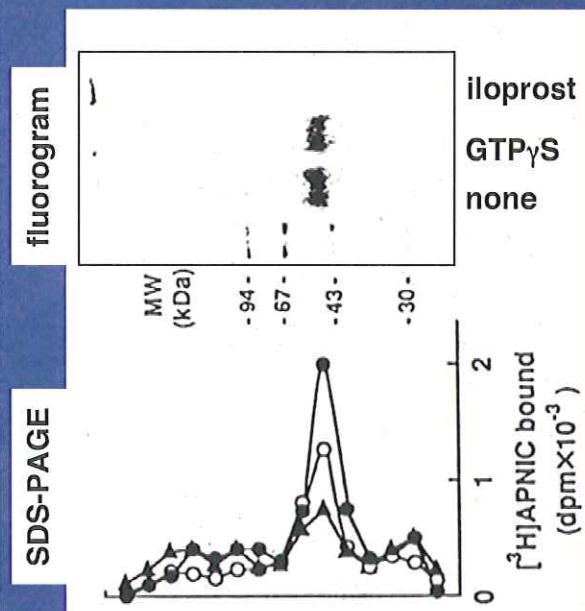
M. Suzuki, et al., *Tetrahedron*, **48**, 2635 (1992).  
S. Ito, et al., *J. Biol. Chem.*, **267**, 20326 (1992).  
R. Noyori and M. Suzuki, *Science*, **259**, 44 (1993).

光親和性標識用分子 : [<sup>3</sup>H]APNIC

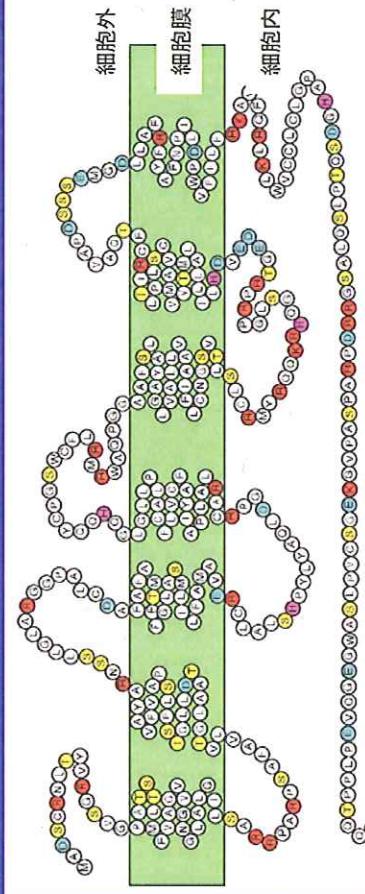
## ■ ブタ血小板を用いた[<sup>3</sup>H]APNICによる光親和性標識実験

SDS-PAGE

fluorogram



## ■ cDNAクローニングによるヒト血小板中のPGI<sub>2</sub>受容体の予想構造



M. Katsuyama, Y. Sugimoto, T. Namba, A. Irie, M. Negishi,  
S. Narumiya, and A. Ichikawa, *FEBS Lett.*, **344**, 74 (1994).

Using the Principles of  
**ORGANIC CHEMISTRY**  
To Explore  
**CELL BIOLOGY**

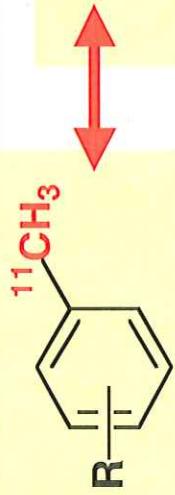
**Stuart L. Schreiber, Harvard University**

高次かつ“動的展開”を模索  
→  
一生体内分子科学の展開へ—

Special Report in C&E News, Oct. 26, 22 (1992)

# 高速[ $^{11}\text{C}$ ]メチル化反応とその魅力

$\text{sp}^2_{\text{aryl}}-\text{sp}^3$

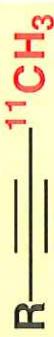


ほとんどの創薬候補物質のPETトレーサー化が可能

$\text{sp}^2_{\text{vinylic}}-\text{sp}^3$



$\text{sp}-\text{sp}^3$



$\text{sp}^3-\text{sp}^3$



4つのメチル化反応

4つのメチル化反応が実現されれば、  
ほとんどの化合物のPETトレーサー化が  
可能となる。

ほとんどの化合物の  
pharmacokinetics/pharmacodynamics  
がわかる。

代謝に安定 →  
PET画像への高い信憑性

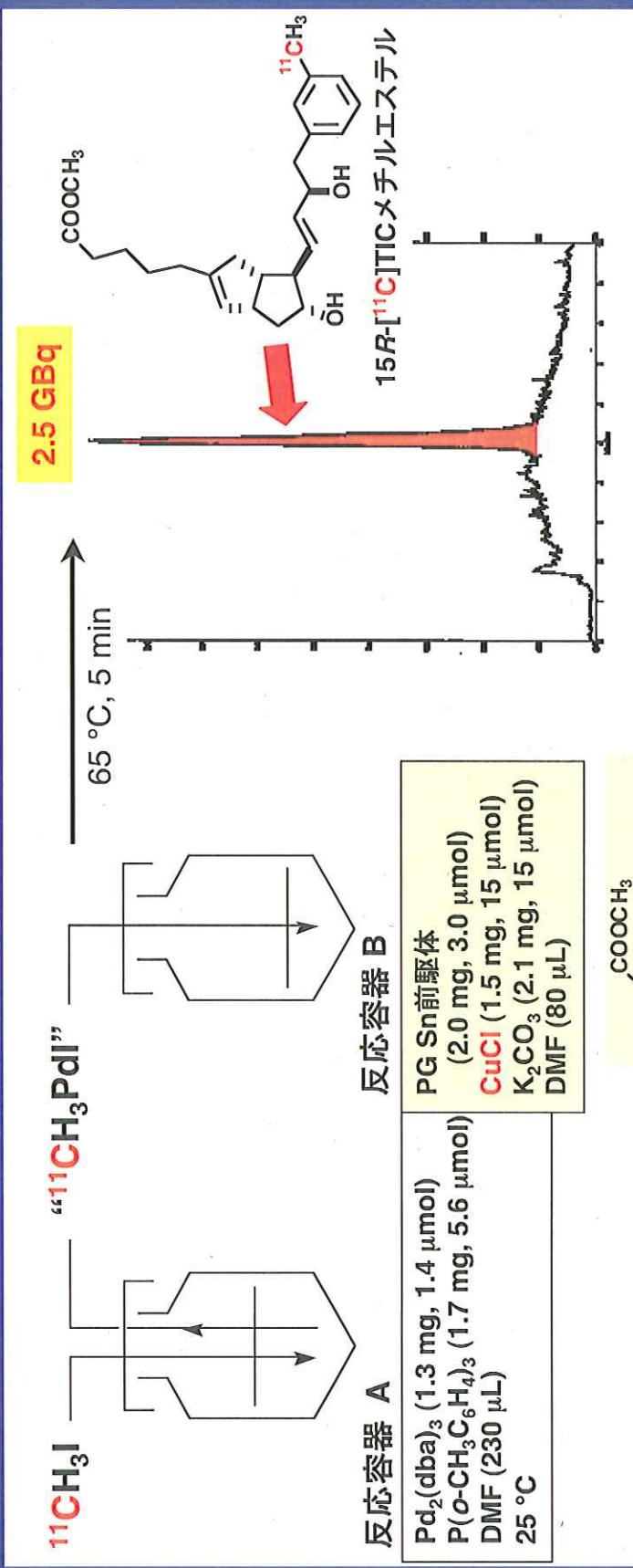
Evidence-based Medicineへ

$\text{CH}_3$ 基：無極性・最小 → 自由度の高い  
分子設計が可能 → スクリーニング  
に最適

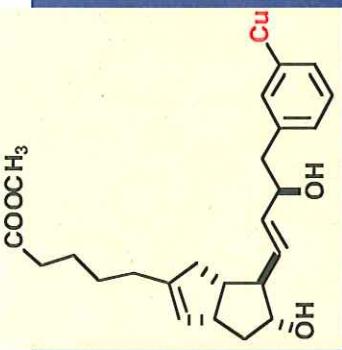
共通前駆体から $^{18}\text{F}$ や $^{76}\text{Br}$   
も容易に導入できる

# ヒト脳への適用可能な高放射能量をもつ 15R-[<sup>11</sup>C]TICメチルエステルの合成を達成

■ 2つの反応容器を用いる2段階操作法を考案

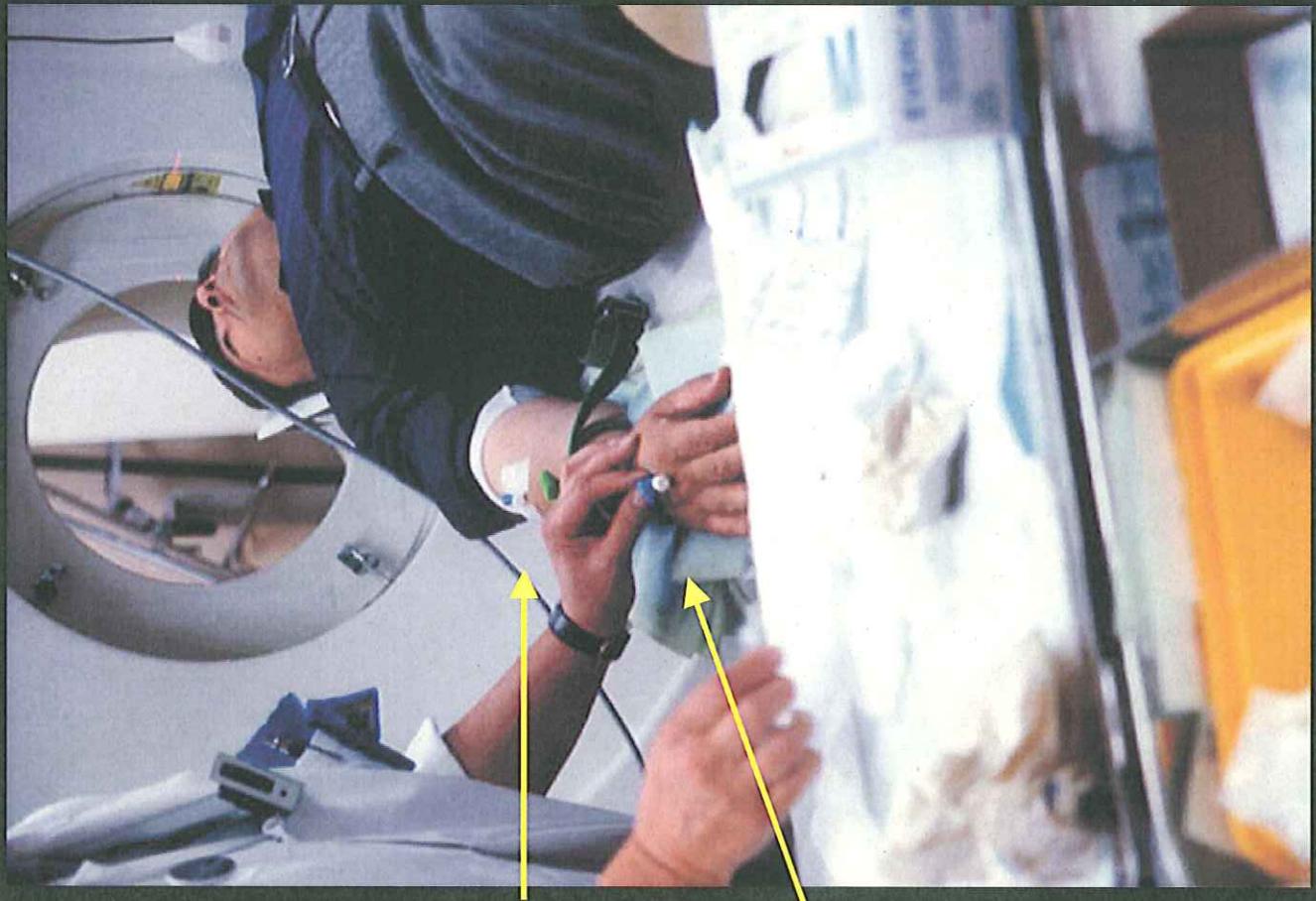


高再現性!  
放射化学收率: 85%  
放射化学純度: 98%以上  
総放射能: 2.5 GBq  
(HPLCによる分離、精製後の値)



M. Suzuki, et al.,  
*Trends Anal. Chem.*, 23, 595 (2004).

**Sacrificed!  
the first volunteer**



**intravenous injection  
for molecular imaging**

**metabolic analysis  
by blood sampling**

**PET study was  
conducted in Uppsala  
University PET Centre**



**オリジナル創薬シーズ・診断用PETトレーナーの開発を  
目指した疾患対応型新規分子プローブの創製**

2001-2005年度, 2005-2009年度



認知症  
アルツハイマー病

がん

脳梗塞後遺症  
虚血性脳血管障害  
くも膜下出血

糖尿病

研究標的とした  
主な疾患

循環器系疾患

ウイルス性疾患  
HIV, 鳥インフルエンザ

炎症・痛み・発熱  
アロディニア  
神経因性疼痛

運動ニューロン病  
パーキンソン病  
筋萎縮性側索硬化症

トランスポーター

新規グループの数 > 500 個 (学術創成研究 (2001~2005年度)、代表者: 鈴木正昭), 参  
画大学・研究機関数 15, 24 研究グループ), 新グループも加わり研究は大きく発展中

$R-M$



共通中間体

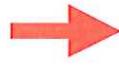
$R$ ; 生理活性化合物

$M$ ;  $R'_3Sn$  or  $R''_2B$

規制緩和：マイクロドーズ臨床試験ガイダンス（2008年6月3日、厚生労働省）

非侵襲的に扱えかつ代謝安定な  
短寿命、中寿命、長寿命放射核素が  
すべて導入可能である

疾患対応型分子プローブの創製と  
PETによる薬物動態解析により



臨床適応創薬候補化合物の早期探索および  
疾患診断におけるPETトレーサーの開発ができる

# イメージング(画像化技術)による疾患診断法の進展

## 医用画像技術の発展



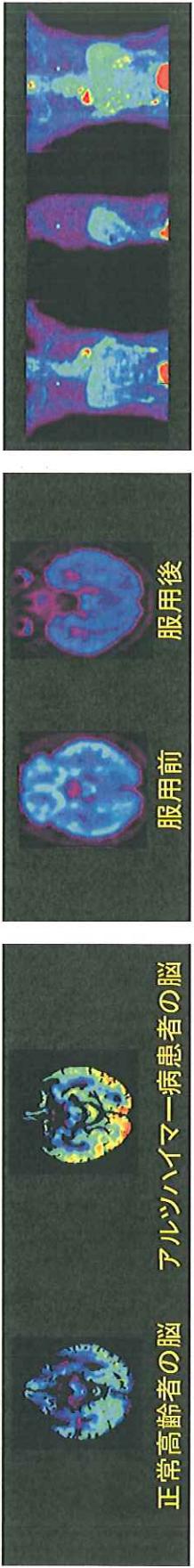
PETとは  
レントゲンによるX線発見



ポジトロン・エミッション・トモグラフィー(陽電子放出断層画像法)  
分子プローブ  
(探り針)  
短寿命ラジオアイソトープで標識した  
分子プローブの極微量投与

## 分子イメージング

生体を構成する様々な分子の性質や機能を明らかにするため、目的とする分子の挙動を生体が生きた状態で画像としてとらえる研究(手法)のこと。これまでの遺伝子研究から生体の機能には様々な分子が関わっています。これらの分子の中には、病気の成り立ちは解明され、さらにそれらをPET用放射性薬剤やMRIの造影剤として用いることにより、生体の中で標的分子を動的・定量的に測定することができます。**大きな可能性(医療革命)を秘めている**



正常高齢者の脳 アルツハイマー病患者の脳  
アルツハイマー病の異常分子を病状の早期に診断する

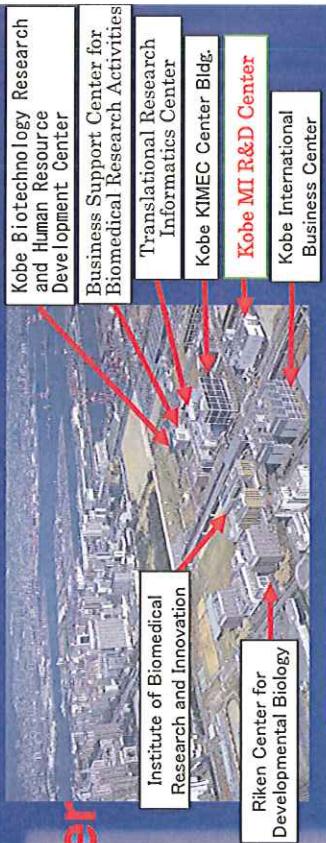
薬の最適投与量を決定する

ガンの早期診断を実現する

# Base for Molecular Imaging Research Program in RIKEN

## RIKEN CMIS in Kobe MI R&D Center

newly constructed at the end of  
2006



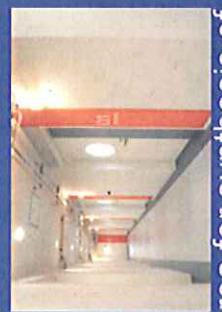
- 4F      Laboratory animal breeding area
- 2F      Office, Synthetic organic chemical labs, etc.
- 1F      RI laboratory area, etc.

Lot area:  
6,000m<sup>2</sup>  
Total floor area:  
8,600m<sup>2</sup>  
4-storied  
(3<sup>rd</sup> floor occupied)

### Major instrumentation

- 2 Cyclotrons
- 7 Hot labs (including one GMP-based)
- 14 Automated synthetic robotics (scheduled)
- 2 PET scanners for small animals
- animal X-ray CT, MRI (3 T), MRI (7.0 T) (scheduled)

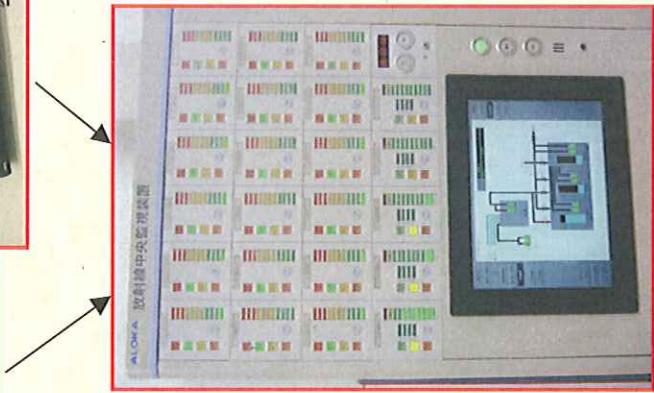
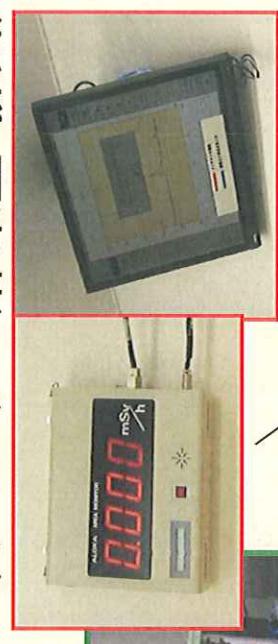
Research efficiency is more than ten times compared with conventional PET institute.



Area for PET imaging PET scanner for animals

## PETプローブ(放射性薬剤)の合成現場

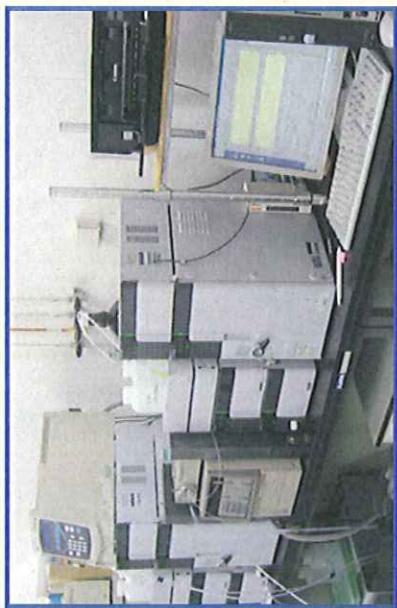
エリアモニター(作業室・排気)



RI環境監視



RI汚染検査



PETプローブ純度検定

“GMP合規工場も整備”

# —日本近代医学の父、Dr. Erwin von Bälz—



ベルツ賞受賞  
★1等賞

2007年11月20日  
ドイツ大使館にて

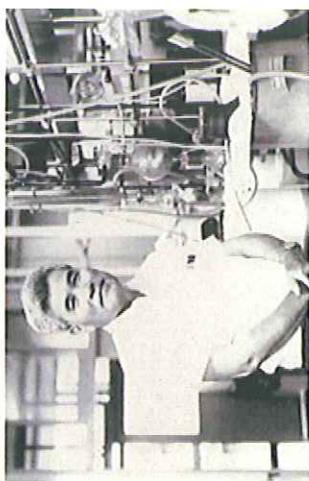
賞題：分子イメージング研究による創薬・疾患診断の革新

ベルツ博士の記念碑  
(東京大学構内にて撮影)

# 平田一門



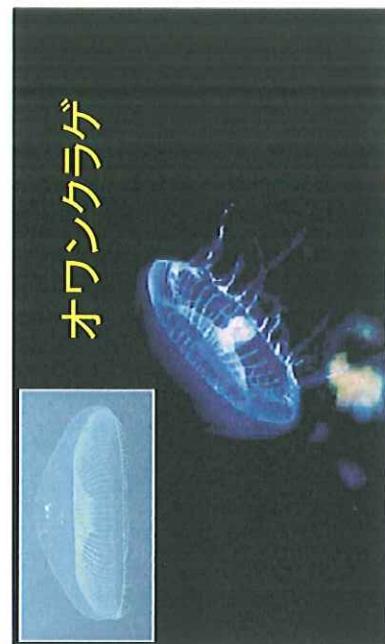
平田 義正先生（1915年5月30—2000年3月5日）  
フグ毒であるテトロドキシンの構造解析をした天然有機化合物の世界的研究者。平田は当時最新技術であった、核磁気共鳴吸収法という方法とメ線回折法でその構造を調べた。平田は野依をはじめ世界的研究者を続々と抜擢し  
大に有機化学あり」と世界に知らしめた。



## 文化功労者



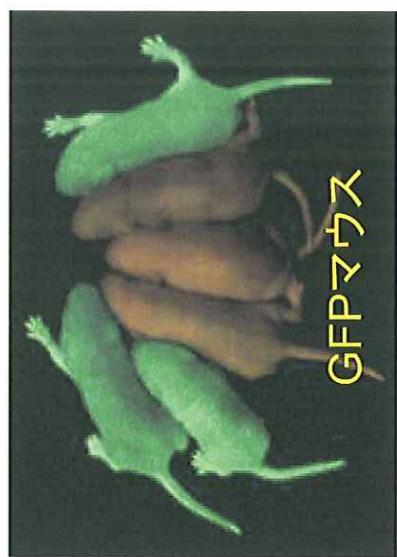
門下生：中西香爾（2007年文化勲章）



下村脩（2008年ノーベル化学賞）  
オワシクラゲの緑色蛍光タンパク質GFPの発見



岸義人（2001年 文化功労者）  
ナトリウムの全合成



後藤俊夫（アサガオの青色の同定）  
山村庄亮（オジギソウの葉開閉機構）  
上村大輔（ナトリウムの構造決定）

バイオサイエンスの進歩に大きく貢献

鈴木正昭（革新的PG合成功法の開発）  
平田／野依ハイブリッド → ヒト生体内分子科学の展開  
PET画像

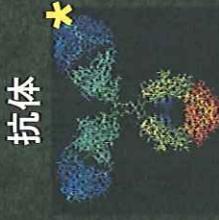
分子イメージング

# 小宇宙へのパラダイムシフト

PET用分子プローブ

分子デザイン

低分子化合物  
(薬剤など)



遺伝子  
(アンチセヌス)



夜空の星を  
見る・見つける  
(大宇宙)

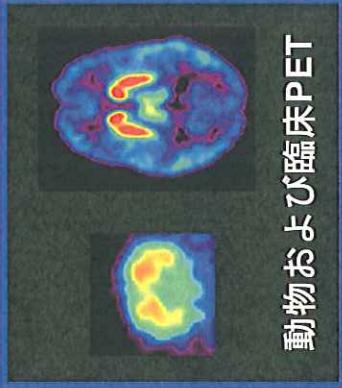


人の中の分子を  
見る・見つける  
(小宇宙)

“consideration”

体内で標的分子に  
特異的に結合

分子イメージング



動物および臨床PET

\* :  $^{11}\text{C}$ ,  $^{18}\text{F}$ ,  $^{13}\text{N}$ ,  $^{15}\text{O}$ ,  $^{76}\text{Br}$ ,  $^{34}\text{mCl}$ , など

→ 生命科学の最終ゴール



奈良の大仏



織田信長像  
(JR岐阜駅)



似顔絵  
岐阜大学医学研究科  
医学系生より寄贈  
卒業生

病院と研究棟

鬼に金棒